

● 制作

雪降る海岸

—チガヤを用いた風景の再生と観光資源の創出—

蔵田 渚旺

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 章 俊華)

KURATA Nao

1. 研究の背景と目的

現代の日本において地方創生は重要性を増している。政府は地方創生戦略の主要な柱として観光業に力を入れており、全体での観光収入の規模は 2000 年の 73 億円から成長を続け、2018 年度には約 3 倍の 215 億円にまで上っている¹⁾。コロナ禍による低迷後、2023 年度には 200 億円超まで回復をしたが、実際には東京や千葉、大阪といった主要都市部に集中し、地方創生には至っていない。地方部には魅力的な観光資源があっても、人口減少や高齢化の進行もあり有効に利用されずに放棄される場合もある。こうした場所で、他に無い体験を提供することで観光客を呼び込む魅力的な場が構成できると考える。そこで本提案では、地方部の自然的文化的資源を持つ場所に対して、地域特性を活用しながら観光資源となりうる空間利用のあり方を提案する。

2. 対象地

対象地は新潟県佐渡市内の佐和田地区にある「雪の高浜」である。佐渡市は市域全体がジオパークに認定され、豊富な自然的要素や日本各地の文化が混ざった独自の文化を持つ。近年では佐渡金山の世界遺産登録への動きが盛んで、観光業は佐渡市の主要産業といえる。しかし入込者数は減少しており、令和元年は平成 6 年の 116 万人の半分以下である²⁾。

雪の高浜は、佐渡市内南西部の真野湾に面する地域で、南西側は海に、北東側は市街地に面する。現在は、敷地の大部分が耕作地として利用をされている。海の側を県道 65 号(佐渡一周線)とクロマツを主体とした防風林帯に囲まれる。

3. 調査・分析

まず、雪の高浜地区の土地利用の変遷を、既往文献や Web 状での投稿、地図等を用いて調査を行なった。それによって、土地の持つ特性と海岸に面する場の構成について理解を深めた。次に、現地調査を行い、対象地の利用状況調査と周辺状況の調査を行なった。

対象地の土地利用の調査により、対象地は昭和中期に入ってから農地として利用されるようになり、それ以前は砂浜が残ったままの海岸砂丘が形成されていたことがわかった。また、現在の農地を形作る海岸に向かって伸びた短冊状の地割は過去に存在した農村群の名残であると考察される。土地についての文献調査を行う中で、雪の高浜という地名は過去に存在した砂浜とチガヤを主体とした群落が合わさり、雪の降



図1 地理院最新写真

図2 1961-1964年航空写真

図3 江戸時代 地図

ったように見えることから名付けられたことが理解できた。土地特性を活用し、観光資源の創出を図る本提案において、地名の由来になったチガヤを用いた場所を主体として場を考えることは有効な手段であると考えた。

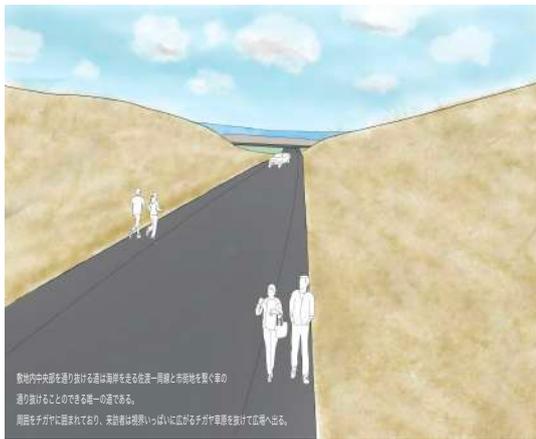
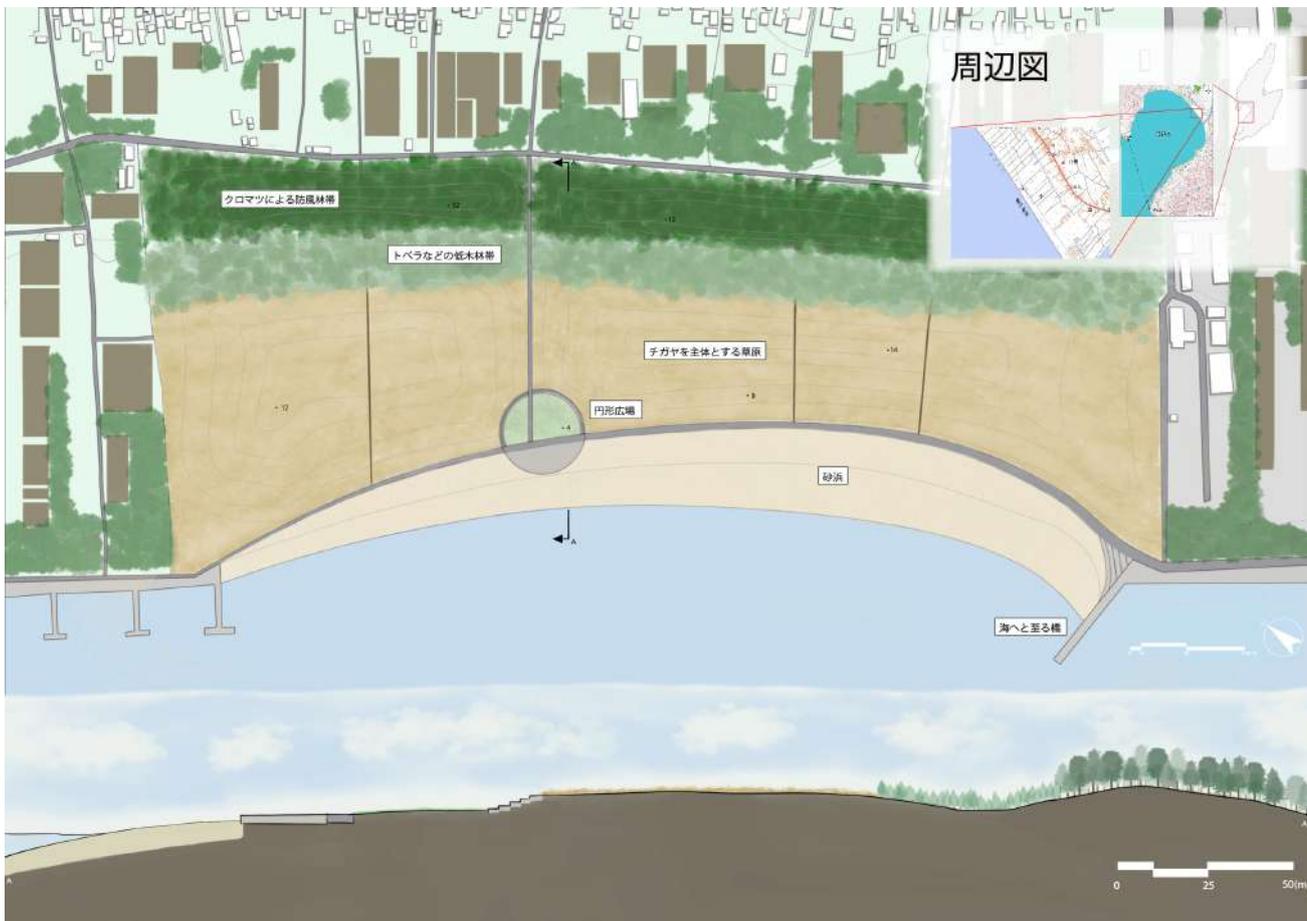
現地調査では、対象地の大部分を占める耕作地において、人口減少や高齢化の影響によって維持管理が為されなくなっている耕作放棄地がかなり目立つ状況であることがわかった。また過去に存在した海岸は、護岸工事によって現在は消失し、コンクリート造りの堤防とテトラポッドによって海岸線が形成されている状況であることがわかった。後背部にある市街地には、観光客に人気のホテルなどの施設も存在するが、地域住民の生活する民家、小学校、神社、老人ホームなどの施設も存在し、様々な属性を持った人が対象地に訪れる可能性があると考えられる。

5. 提案

以上の調査と考察から、提案では、チガヤを主体とした草原と砂浜による景色を再生することで空間を形成する。チガヤによる広大な草原は国内では例を見ず、一面に真っ白な穂をつけたチガヤ草原は観光客を呼び込むための観光資源になりうると考える。再生した砂浜を維持するための技術的設計やチガヤ群落を主体とした植生のあり方は、既往研究³⁾や存在する海岸砂丘の構成⁴⁾を参考にした。

参考文献

- 1) 国土交通省(2020), 国土交通白書 2020
- 2) 一般社団法人佐渡観光交流機構(2020), 2019 年度佐渡観光データ調査分析業務報告書
- 3) 松島 肇・有田 英之・内藤 華子・菅原 峻 (2014), 石狩海岸における海浜環境の多様性とその保全への取り組み
- 4) 磯部雅彦(1994), 海岸の環境創造 ウォーターフロント学入門



分解アクトメ図

